

2026年度 法学部 課題図書

〈課題図書リスト〉

1	野矢茂樹『論理トレーニング 101 題』（産業図書、2001 年）
	<p>内容：生き生きした文章を問題として取り上げ、実践的な論理の力を鍛え上げることをめざす。接続表現の捉え方、議論の整理の仕方、論証の構造、批判の技術を演習形式で扱う独習書。</p> <p>一言：わかりやすく説得力のある文章とそうでない文章の違いはどこにあるのだろうか。文と文、段落と段落の結びつきが論理（ロジック）に支えられているかどうか、両者を分けるポイントだ。本書に収められた 101 の問題を解くことで、接続表現や論証の構造に注意しながら文章を読む力が身につく。また、そうした観点から自分の書いた文章をチェックする習慣は、論理的な文章を書くうえで役に立つ。読んだ後に自分が賢くなったと実感できる一冊だ。</p>
2	戸田山和久『思考の教室 じょうずに考えるレッスン』（NHK 出版、2020 年）
	<p>内容：“じょうずに考える”ためには、どんな装置を使って、何をどのように勉強すればいいのか？ 語彙力強化の秘伝から、じぶんの考えを効率的に伝えるための文章設計術、相手の考えをきちんと理解するためのクリティカル・リーディング、相手といっしょに考えるためのディベート術までを解説。</p> <p>一言：「生まれつき頭の良し悪しの差があるのではない、正しく考える「方法」を習得しているか否かの違いがあるだけだ」。デカルトはそのように述べました。現代版『方法序説』とでも言うべき本書は、他者とともに生産的かつ創造的に考えるための方法を丁寧に教えてくれます。そのコツをつかんでしまえば、読書、調査、レポート作成、ディスカッションといった大学の授業全般に十分対応できます。ところどころに挟まれるあまり面白くないジョークについては、まあご愛嬌ということで。</p>
3	納富信留『プラトンとの哲学 対話篇をよむ』（岩波新書、2015 年）
	<p>内容：ソクラテスを中心に、数々の登場人物がことばを交わし、思索を深めていくプラトンの対話篇。「君はこの問いにどう答えるか？」作品の背後から、プラトンがそう語りかけてくる。『ソクラテスの弁明』『ポリテイア』『饗宴』などの代表作品を読み考えながら、プラトンの問いと対峙する。二千年の時を超え、今も息づく哲学の世界へ。</p>

	<p>一言：古代ギリシアのアテネは民主主義の故郷だが、プラトンが生きた時代にはすでに崩壊の危機にあった。そしてこの危機の時代に、哲学の祖ソクラテスが登場したのである。知と対話に基づいて民主制を守ろうとするソクラテスと、それを冷笑する「影響力ある」論者たちとが対決する様子は、今日の国内外の状況と奇妙なくらいぴたりと重なる。重要性を増しているプラトンの〈全米トップ10大学の課題図書ランキング一位〉という地位は、しばらく揺るがないだろう。</p>
4	<p>杉原泰雄『憲法読本 第4版』（岩波ジュニア新書、2014年）</p>
	<p>内容：〈憲法がはっきりと認めていることがらについて、憲法がはっきりと認めている方法でしか、権力者は政治を行うことができない〉という「立憲主義」の解説から始まる、日本国憲法の定評ある入門書の最新版。憲法改正への声の高まる今、人権保障、権力の民主化、平和主義など世界に誇れる現憲法の考え方を深く学ぼう。</p>
	<p>一言：国の根本規範たる「憲法」の歴史を学びつつ、人権、民主主義、平和主義などのような基本的な憲法の内容を鳥瞰できる。憲法は法学部生の必修科目でもあり重要だ。入学前にざっと予習しておきたい人に特にお勧めする。</p>
5	<p>池田真朗『民法はおもしろい』（講談社現代新書、2012年）</p>
	<p>内容：知らないで損をしてしまう、「人生の必修科目」！ 連帯保証人の悲劇とは？ ゴミ集積場に出したゴミは誰のもの？ ネットで誤って承諾をクリックしてしまったら。振り込め詐欺にあったら――。変わりつつある「現代社会の基本法」を第一人者がわかりやすく紹介する格好の入門書。</p>
	<p>一言：私人と私人との関係を決める最も重要で基本的な法律が「民法」だ。この民法の社会における役割を広く概観できる。1年次から必修科目にもなる「民法」を入学前にざっと知っておきたい人に特にお勧めする。ただし、この本は、現在の民法が改正された年よりも前に出版されているため、記述されているいくつかの細かい議論は時代遅れのものとなっている。この変更された内容は、入学後の講義などで補うとよい。</p>
6	<p>高橋則夫『刑の重さは何で決まるのか』（ちくまプリマー新書、2024年）</p>
	<p>内容：「主文 被告人を懲役10年に処する」――その根拠を考えてみたことはあるだろうか？ 犯罪とは何か、なぜ刑が科されるのか。制裁としての刑罰はどうあるべきか。「刑法学」の考え方を丁寧に解説する。</p>

	<p>一言：犯罪者に対し刑罰を科すことを根拠づける最も重要な法律が「刑法」だ。「刑の重さ」を決めるという刑法の最終目的に行きつくまでに考えなければならない諸論点が体よく纏まっており、刑法の基本的な考え方を学ぶことができる。入学前に「刑法」の予習をしたい人に特にお勧めする。</p>
7	<p>山本圭『現代民主主義 指導者論から熟議、ポピュリズムまで』（中公新書、2021年）</p>
	<p>内容：二〇世紀以降、思想・理論ともにさらなる多様化が進む民主主義。本書は、政治学をはじめ、ウェーバー、シュミット、シュンペーター、アーレント、デリダ、ムフなどの思想から、その大きな潮流と意義を捉える。指導者や選挙による競争、市民参加、熟議／闘技、ポピュリズムといった多くの論点から、現代デモクラシー論の可能性に迫る。試行錯誤を繰り返してきた軌跡を通して、二一世紀の民主主義を模索する試み。</p>
	<p>一言：多くの法律は政治過程を通じて作られており、政治と法は密接に関連している。様々な問題を露呈している現代の民主政を紐解くことで、社会や国家の仕組みをより深く理解しよう。</p>
8	<p>杉田敦『自由とセキュリティ』（集英社新書、2024年）</p>
	<p>内容：安全への渴望か——。それとも、多様性の重視か——。私たちはいったい何を望んでいるのだろうか？ ミル、ホッブズ、ルソー、バーリン、シュミット、フーコーという六名の思想家の名著から“今”を読む。</p>
	<p>一言：自由と安全は法学にとっても重要な概念だ。単なる印象ではなく、連綿と紡がれてきた思想史の流れの中でこれらを読み解くことで現在の言説に対する批判的態度を養うことができる。</p>
9	<p>赤根智子『戦争犯罪と闘う』（文春新書、2025年）</p>
	<p>内容：ロシアによるウクライナ侵攻とイスラエルによるパレスチナへの非人道的な攻撃。目まぐるしく国際情勢が変化するなか、この二つの戦争に向き合い、プーチンとネタニヤフに逮捕状を出した国際刑事裁判所（ICC）。日本人として初めてそのトップに就任した著者は、ほどなくしてプーチンから逆指名手配を受けることにもなった。さらにはトランプ大統領の大統領令による経済制裁の脅威にさらされるなど、世界規模の戦争犯罪に向き合ってきた国際刑事裁判所はいま、存続の危機にある。</p>

	一言：国際社会のなかで「法の支配」を貫徹することの難しさと、そこで奮闘する法律家の姿を通じて、法学部の学びが日本だけではなく世界へとつながっていることを体感してほしい。法学を学ぶことで世界中の法律家と対話する共通基盤を得ることができるかもしれない。
10	丸山泰弘『死刑について私たちが知っておくべきこと』（ちくまプリマー新書、2025年）
	内容：賛成派も反対派も「思い込み」で語る前に——日本の死刑制度とその運用にはどのような問題があるのか、維持するのならどうあるべきか、考えるための土台を示す。
	一言：証拠に基づく（evidenced-based）議論はあらゆる学問分野で重要視されている。法学部の学生が特に興味を抱く死刑問題を、印象ではなく実証的な証拠で論じるとはどういうことなのかを本書を通じて学ぶことができる。
11	児玉真美『安楽死が合法の国で起こっていること』（ちくま新書、2023年）
	内容：日本にも、終末期の人や重度障害者への思いやりとして安楽死を合法化しようという声がある一方、医療費削減という目的を公言してはばからない政治家やインフルエンサーがいる。「死の自己決定権」が認められるとどうなるのか。
	一言：1年生では4000字の論文を書く必修科目があるが、そのテーマに安楽死を選ぶ学生は少なくない。法整備を進めるべきという意見が多いが、容認後の社会的影響を考えるためにも本書の一読を勧めたい。論点整理に役立つはずだ。

*リスト内の「内容」とは出版社HPから抜粋した文言で、「一言」とは教員からの推薦コメントです。

以 上